

永遠の十三 ～海野十三と江戸川乱歩～

日時：2014 年 5 月 17 日（土）午後 2 時 30 分 会場：北島町立図書館・創世ホール 2 階ハイビジョン・シアター
主催：海野十三の会 講師：中 相作（なかしょうさく 江戸川乱歩研究家、名張人外境主宰者、名張市在住）

- 明治 27 年（1894） 10 月 21 日、江戸川乱歩、三重県名張町新町に生まれる。本名、平井太郎。生後まもなく父の転勤により転居。三歳から十八歳まで名古屋で過ごす。
- 明治 30 年（1897） 12 月 26 日、海野十三、徳島市徳島本町に生まれる。本名、佐野昌一。明治 39 年、父の転職により神戸へ転居。
- 明治 45 年（1912） 乱歩、早稲田大学予科に編入。のち、政治経済学部に進む。
- 大正 5 年（1916） 乱歩、早稲田大学を卒業し、大阪の貿易会社に就職。十三、早稲田大学予科に入学。のち、理工学部に進む。
- 大正 12 年（1923） 乱歩、「新青年」にデビュー作「二銭銅貨」を発表。十三、早稲田大学を卒業し、通信省電気試験所に勤務。
- 大正 14 年（1925） 乱歩、初の小説集『心理試験』を出版。十三、技術専門書『米国製真空管一般特性表』を佐野昌一名義で初出版。
- 大正 15 年（1926） 乱歩、1 月に大阪から東京へ転居。「浅草趣味 *1」を発表。十三、「無線と実験」に科学童話「ラヂ夫と電子王の話」を発表。初めてフィクションが活字となる。
- 昭和 2 年（1927） 十三、「無線電話」に海野十三名義による初の科学小説「遺言状放送」を発表。
- 昭和 3 年（1928） 十三、「電気風呂の怪死事件」で「新青年」に初登場。
- 昭和 4 年（1929） 乱歩、「蜘蛛男」で「講談倶楽部」に初登場。
- 昭和 5 年（1930） 十三、海野十三名義による初の単行本『麻雀の遊び方』を出版。
- 昭和 6 年（1931） 9 月、満州事変が勃発し、十五年戦争の戦端が開かれる。
- 昭和 7 年（1932） 十三、初の小説集『電気風呂の怪死事件』を出版。
- 昭和 8 年（1933） 十三、「太平洋雷撃戦隊」で「少年倶楽部」に初登場。
- 昭和 9 年（1934） 十三、「探偵小説管見 *2」。乱歩、「中央公論」に「柘榴」。
- 昭和 10 年（1935） 十三、「乱歩氏の懐し味 *3」、「本格探偵小説観 *4」。乱歩、「探偵小説壇の新なる情熱 *5」、「日本の探偵小説 *6」、「日本探偵小説の多様性について *7」。
- 昭和 11 年（1936） 乱歩、「怪人二十面相」で「少年倶楽部」に初登場。十三、「新青年」に「深夜の市長」、「深夜の東京散歩 *8」。
- 昭和 13 年（1938） 十三、「少年倶楽部」に「浮かぶ飛行島」、「キング」に「敵機大空襲」（『東京空爆』）。
- 昭和 14 年（1939） 十三、「少年倶楽部」に「太平洋魔城」、翌年にかけて「東日小学生新聞」などに「火星兵団」。
- 昭和 16 年（1941） 十三、1 月、世田谷の自宅庭に防空壕を築造。海軍省から徴用され、報道班員となる。乱歩、秋ごろ、初めて町会に出席し、防空群長を担当。のちに町会役員となる。12 月、日本海軍の真珠湾攻撃で太平洋戦争開戦。
- 昭和 17 年（1942） 十三、1 月、海軍報道班員として南方に赴き、 Deng 熱に感染して 5 月に帰還。
- 昭和 19 年（1944） 十三、12 月に「空襲都日記」を起筆。翌年 5 月まで。
- 昭和 20 年（1945） 3 月 10 日、東京大空襲。乱歩、4 月に家族を福島県保原町の知人宅に疎開させ、単身池袋の家に残る。4 月 13 日、東京にふたたび大空襲。十三日記／4 月 14 日《○昨夜二十三時頃、わが横鎮は関東海面に警報を出したが、果して敵一機は房総に入り、つづいて敵大挙し、三月十日以来の帝都市街夜間爆撃となった》。乱歩自伝《十三日夜、B29 の大空襲あり、池袋地区焼野原となる。私の町会は南の半分が焼失し、隣組も全焼したが。私の家一軒だけ不思議に助かった》。十三、5 月に「降伏日記」を起筆。12 月まで。乱歩、6 月に家族の疎開先へ移る。
- 十三日記 8 月 10 日《○今朝の新聞に、去る八月六日広島市に投弾された新型爆弾に関する米大統領トルーマンの演説が出ている。それによると右の爆弾は「原子爆弾」だという事である。／あの破壊力と、あの熱線輻射とから推察して、私は多分それに近いものか、または原子爆弾の第一号であると思っていた》《戦争は終結だ》。12 日《○とにかく、遂にその日が来た。しかも突然やって来た。／どうするか、わが家族をどうするか、それが私の非常な重荷である。／○女房にその話（※みなで死ぬこと）をすこしばかりする。「いやあねえ」とくりかえしていたが、「敵兵が上陸するのなら、死んだ方がましだ」と決意を示した。／それならばそれもよ

し。ただ子供はどうか?》《○自分一人死ぬのはやさしい。最愛の家族を道づれにし、それを先に片づけてから死ぬというのは容易ならぬ事だ。片づける間に気が変になりそうだ、しかしそれは事にあたれば何でもなく行なわれることであり、杞憂であるかもしれぬ》。13日《○朝、英(※夫人)と相談する。私としてはいろいろの場合を説明し、いろいろの手段を話した。その結果、やはり一家死ぬと決定した。／私は、子供達のことを心配した。ところが英のいうのに、かねてその事は言いかしてあり、子供たちは一緒に死ぬことにみな得心しているとのことに、私は愕きもし、ほっとした。そして英からかえって「元気を出しなさいよ」と激励された。／事ここに決まる。大安心をした》。14日《○万事終る》。15日《○本日正午、いっさい決まる(※終戦のラジオ放送) 恐懼の至りなり。ただ無念。／しかし私は負けつつもりはない。三千年来磨いてきた日本人は負けたりするものではない。／○今夜一同死ぬつもりなりしが、忙しくてすっかり疲れ、家族一同ゆっくりと顔見合やすいとまもなし。よって、明日は最後の団欒してから、夜に入りて死のうと思いたり》。16日《○死の第二手段、夜に入るも入手出来ず、焦慮す。妻と共に泣く。明夜こそ、第三手段にて達せんとす》。17日《○昨日から、軍神杉本五郎中佐の遺稿「大義」を読みつつあり、段々と心にしみわたる。天皇帰一、「我」を捨て心身を放棄してこそ、日本人の道、大楠公が愚策湊川出撃に、かしくみて出陣せる故事を思えとあり、又楠子桜井駅より帰りしあの処置と情況とを想えとあり。痛し、痛し、又痛し。／○昨夜妻いねず、夜半に某所へ到らんとす。これを停めたる事あり。／妻に「死を停まれよ」とさすとす。さすとすはつらし。死にまさる苦と辱を受けよというにあるなればなり。妻泣く。そして元気を失う。正視にたえざるも、仕方なし。ようやく納得す。われ既に「大義」につく覚悟を持ち居りしなり》。18日《○熱あり、ぶったおれていたり》。19日《○ようやく気もだいぶ落付く。されど、考えれば考えるほど苦難の途なり。任はいよいよ重し。／○夜半、忽然として醒め、子供をいかにして育てんとするかの方途を得たり。長大息、疲労消ゆ。有難し、有難し》

- 乱歩自伝 《保原のラジオでは、天皇のお声はハッキリ聴きとれなかったが、あとの放送や新聞で真相がわかった。それから数日間は、米軍が上陸してきて、どんな目にあわされるかわからないというので、老幼婦女は、東京から逃げ出しているという報道が、あわただしく伝わってきた。全くの混乱と国民放心の時期であった。／そのうちに、米占領軍の方針が案外温和であることが徐々にわかってきた。略奪、殺戮、暴行など、昔の戦争から想像していたようなことは、行われていないことがはっきりしてきた。私はそのとき、大腸カタルが治らないで、骨と皮ばかりになって寝ていたのだが、その病床で、私は探偵小説はすぐに復活すると考えた》
- 乱歩、11月に疎開先から池袋の自宅へ家族と帰還。
- 昭和 21 年 (1946) 十三、略血。乱歩、「グルーサムとセンジュアリティ *9」、「探偵小説の方向 *10」。
- 昭和 22 年 (1947) 乱歩、11月に関西へ講演旅行し、岡山県に疎開していた横溝正史と再会する。十三、「探偵小説雑感 *11」を發表。
- 昭和 24 年 (1949) 5月17日、十三、結核のため51歳で死去。乱歩、23日の告別式で「弔辞 *12」を読み、「海野君のこと *13」、「深夜の海野十三 *14」を發表。
- 昭和 28 年 (1953) 乱歩、座談会「探偵小説あれこれ」[* 15]。
- 昭和 30 年 (1955) 乱歩、「ペン皿とテレヴィ *16」。
- 昭和 37 年 (1962) 3月、阿波掃苔会と四国文学会が海野十三の碑を建てる会を結成し、趣意書を配布。機関誌「JU通信」が創刊され、乱歩は「趣意書に添えて *17」、「祝辞 *18」を寄稿した。碑には「『地球盗難』の作者の言葉」から引用した十三の文章《全人類は科学の恩恵に浴しつつも同時にまた科学恐怖の夢に脅かされている恩恵と迫害との二つの面を持つ科学神と悪魔との反対面を兼ね備えている科学にわれわれはとりつかれているかくのごとき科学時代に科学小説がなくていいであろうか》と乱歩の碑文《海野十三は徳島市の生んだ優れた推理小説家科学小説家である彼は科学者にして文学者という稀なる資質に恵まれ豊饒な作品によって推理小説界に重きをなした彼はまた科学小説の先駆者であった日本ではようやく流行の兆を見せはじめたこの分野に昭和初期彼は早くも先鞭をつけ多くのすぐれた作品を残したのである》が刻まれ、徳島公園内で5月29日に除幕された。
- 昭和 40 年 (1965) 7月28日、乱歩、脳出血のため70歳で死去。
*十三の日記は橋本哲男編『海野十三敗戦日記』(2005年、中公文庫)から、乱歩の自伝は江戸川乱歩全集第29巻『探偵小説四十年(下)』(2006年、光文社文庫)から引用した。

海野十三と江戸川乱歩 関連随筆評論集

浅草趣味「*1」

江戸川乱歩

さて野外いかものに関して、書き洩らせないのは深夜の浅草情景である。興行物のはねるのが大抵十時、それから十二時頃までは、まだ宵の口である。ソロゾ口と人通りが絶えない。やがて活動小屋の電飾が光を減じ、池の鯉のはねる音がハッキリ聞える頃になると馬道から吉原通いも人足もまばらになる。馬道辺では朦朧車夫が跳梁し出す。そして、公園のベンチに取り残されるのは、ほんとうの宿なし、一夜をそこで明かそうという連中ばかりである。警官の巡回がはげしくなる。角袖が何食わぬ顔で、うるんな奴の煙草の火を借りに来たりする。

「オイ、お前は宿があるのか」

「ハイ、実は帰りはぐっちまいまして、電車はなくなる、仕方がないのでここで夜明しをさせて頂きます。どうか今夜の所はお見逃しを」

なんて問答が聞え出す。警官も世話がやき切れないと見えて、夜毎にベンチを宿とするもの十数人を数える。それが大抵は常習者だ。料理屋なんかの、ごみ溜をあさって、大きな竹の皮に一杯残飯を持って来る奴がある。てんでにアルミの弁当箱を持っていて、それを分けてつめる。明日の弁当になるのだ。残った分は皆して手掴みでムシャムシャやる。食いながら、深夜の浅草を、ピクニックにでも来たつもりで、世間話をしている。なかなか楽し相だ。

これらは別状ないのだが、そこへ時々異形のものが見れる。男のくせに白粉を塗っている。そして通行人、

「チョイト、あなた」

なんて、くねくねと身体をよじらせて、手招きをする。野外かげまとも云うべき代物だ。公園の隅々には、

云うまでもなく、淫売屋のボン引婆さんが、うさん臭い顔をして立っている。夜鷹というものには、不幸にしてまだ出会わないが、時に出ないとも限らぬ。

初出：新青年 大正15年9月号

底本：江戸川乱歩全集第24巻 平成17年

探偵小説管見「*2」

海野十三

思うにわが日本人ほど、種類の多い探偵小説を書く人種は外にいないのではあるまいか。日本人がそれを好むのは、一つはその天性によるものである。外国では専ら純本格の探偵小説が流行る。それ等の主体は皆トリックである。

外国の読者は科学常識が進んでいて、謎を解くことに誰かが相当の興味を感じるのである。だから純本格のものが多いのも道理である。

これに反してわが国の読者は文芸的には外国の読者階級よりも遙かに秀でていて、科学的では外国に於て見るが如きほど普及していない。此等の事情より考えてみても、わが国には純本格以外の探偵趣味的小説の歓迎されることが理解されるように私は思うのである。

そんなわけで、私はわが国の探偵小説に変格の多いことをそんなに慨いてはいない。むしろ変格の多いという事に探偵小説の将来性を認めている。

今日までに日本独特の変格探偵小説の評論も、その作品の分類論さえもまだ出ていないけれど、他日必ずそれが論ぜられる時期が来るだろう。其の時こそ探偵小説なる言語の意味が今日以上にズッと明瞭になることと思う。

繰り返して云うが、探偵小説とは凡そ探偵趣味の入っている小説を指して云うのが至当で、純本格探偵小

説だけに限るのは適當でない私は考える。

そして其の意味に於ての探偵小説は、もつと勇敢に、新しい型を求め、此処ぞと思う方向にドンドン拡大してゆくのがよいと考えるものである。

初出：新青年 昭和9年10月号

底本：海野十三全集別巻1 平成3年

乱歩氏の懐し味「*3」

海野十三

誰しも江戸川乱歩といへば、氏の作品に現れてくるやうなグロテスクな人物を想像するだらう。ところが氏に会つてみると、凡そ氏がそれと反対に、如何にも慈悲深いお地蔵さまのやうな人物であるのに駭かされるであらう。或る酒席で若い妓がその席に乱歩先生が交つてゐられると聞き、先生はどこにいらつしやるのか教へてくれと私にせがんだ。私は、それより君が当てるてみるといふと、彼女はそれなればと一座を見廻して、遂に指したのはその中の最もグロテスクなる人物だつた。私はその大変な誤りを指摘したが、後で本物の乱歩氏を知り当てる彼女が私に向つて、乱歩先生が、あんな優しい方とは鳥渡信じられないわねと感歎したのであつた。

しかし乱歩氏の優しさとか懐しさとかはその風貌に於て発見するよりも、更に著しく、氏の平常生活に於て見出すものである。氏は極めて正直であつて飾らない。そしてよく探偵小説のことを心配し、友人の身の上を案じそして新人に関心を持つことも比類なく、「あの人はどうなつたかなア」などと、途中で名前を消した同好の無名作家のことを想出して不図懐懐されることが屢々である。人間乱歩の懐し味を感じる者は、私だけではなからうと信ずる。

平凡社版の乱歩の全集の第十三巻の最後に「探偵趣

味十年」といふのがある。これは氏が十年に亘る創作三昧の赤裸々なる叙述であるが、この一篇を読んだ者は私が此処に云つたことを容易に理解してくれるだらう。私はあの一篇をバイブルとしてゐる。私は腹立たしい時や面白くない時や悲しい時には、人間乱歩を綴つたあの一篇を読みかへして機嫌を直すのが例である。筆を擱くに當つて乱歩氏に申す。どうか貴方もあれを読みかへされてそして以前のやうに元氣になつて下さい、と。

初出・底本・探偵文学 昭和10年5月号

〔全文〕

本格探偵小説観〔*4〕

* * *

本格探偵小説は読んで面白いが、書いては一向面白くないものだ。

海野十三

本格探偵小説は推理でもつて謎が解けるように出来ているので、読むのにも安心をして読める。また謎は必ず解いてあるから、腹を立てないで読了できる。

しかし、そういつても、これが凡ての本格探偵小説に当て嵌めるものではない。余程の傑作についてそう云えるので、本格探偵小説と称するものならば何れにも云えることではない。寧ろ或る場合には解決の鍵があまりにもお粗末に或いはあまりにも難解な形で述べられていたために、読了後かえつて腹を立てるものも少なくない。前者にはクリスティーの短篇の在るものを挙げると、後者には手近かなところで海野十三のものを挙げることが出来る(しかし海野十三としては、この点に關し、いささか所信もあるのであるが、ここには記さない)。とにかく本格物の拙劣なのは砂を噛む以上に面白くない。そこへゆくと変格物の拙劣なものの方がずっと面白い。桁ちがいに面白い。

私などはいつとも拙劣な本格物を書いているせいかも知れないが、本格物を書くことは一向面白くない。江戸川乱歩氏は非常なる本格探偵小説崇拜者であるが、

氏の所論を伺つてみると、巧妙なる歯車仕掛けのよな構想や複雑な連立方程式を解いてゆくときのよな推理に大きい魅力を感じていられることがよく判る。だが私はそれ等に対し、氏ほどの魅力を感じることはできない。左様な推理に關しては、寧ろ高等な電磁気理論などに於て至るところに発見されるものの方が、更に一層本格的であり複雑でありそして巧妙である。私は科学畑に育つたためか、江戸川氏に比して其の点たいへん不感症であると思う。そんなわけだから、私は本格物を書くのに情熱が湧いて来ない。たまたま構想を纏めあげても、模擬試験問題を一つ拵えあげたぐらゐの感興しか湧いて来ない。

これが変格物だと、構想を文章に綴つてゆくのに、後へゆくほどだんだんと創作の情熱がでてきて、自分ながら怖いような三昧境に入れるのである。時間なども、あまりに暁の来る慌しさに腹が立つほどであるが、本格物になると一向に筆が進まず、襲つてくる睡魔の前に降服してしまひやすい。

これほど作るのに骨の折れる本格探偵小説だから、これを書いてくれる人を尊敬しなければならぬと思ふ。江戸川氏が自分では本格物を書こうとしない癖に、常に進んで本格物を擁護せられるのもやはりこのことを考へてのことではないかと思ふ。

兎に角私にとつて読むに好ましく、書くに好ましくない本格探偵小説ではある。

初出・探偵文学 昭和10年7月号

底本・海野十三全集別巻1 平成3年

* * *

探偵小説壇の新たな情熱〔*5〕

江戸川乱歩

日本の探偵小説はその作風の多様性に於ては、英米にも見ることに出来ない特殊の発達を示しているのであるが、まだ短篇時代を脱することが出来ず、僅かの例外的な作品を除いては、本当の長篇探偵小説という

ものは現われていないと云つてもいい。そこに英米の探偵小説界との大きな懸隔を否むことは出来ないのである。この部面にこそ我々に残された最も大きな仕事がある。仮令この国の出版界の事情が純粹の長篇小説の製作に適しないにもせよ、探偵小説壇に燃え出でた新たな情熱は、未開拓の多様性へと同時に、この長篇探偵小説の部面に注がなければならないと思う。

初出・読売新聞 昭和10年9月

底本・江戸川乱歩全集第24巻 平成17年

日本の探偵小説〔*6〕

* * *

江戸川乱歩

二 日本探偵小説壇の特殊の事情について

上記の二つの事情、即ち読書界の需要と、作家達の素質とが結びついて、特殊の発達を見た我々の探偵小説界では、一般に探偵小説雑誌「新青年」出身の作者を、その作品の傾向が如何にあろうとも、「探偵作家」という一いろの名称によつて呼ぶ慣わしとなつてゐる。読書界もジャーナリズムも、作者自身も、この習慣に従つてゐる現状である。そういう特別な事情から、我々の所謂探偵小説壇は、純粹の探偵小説と同時に、或はそれ以上に、犯罪小説、怪奇小説などに於ても、世界の水準に比べて決して見劣りのしない作品を生んでいるのであつて、その發生上の因縁からしても、又、読者をうつつ力に於て、文学的風味に於て、非探偵小説の方に一層優秀な作品があるという理由からしても、我々は日本の探偵小説を語る場合、それらの犯罪、怪奇の文学を無視することは出来ない。無視しては意味をなさないのである。

三 作家と作品(その一)

海野十三 海野十三は專業の探偵作家ではない。しかし、探偵小説壇への登場が遅かつたにも拘らず、少くとも「新青年」誌上では、その作品数、甲賀

三郎、大下宇陀児に次いで第三位を占める程の精力家であつて、專業作家を顔色なからしめている。彼も亦電気学を専攻し現に技術官の職に在る人であり、それが彼の探偵小説に反映するのは自然であつて、処女作「電気風呂の怪死事件」の主題は偶然ではなかつたのである。その後「新青年」誌上に執筆した連続短篇小説以下多くの探偵小説があるが、処女作の外に「麻雀殺人事件」「省線電車の射撃手」「爬虫館事件」などを主要作品と見るべく、その大部分は理化学的トリックを中心とするものであつた。彼は一方ではウエルズ風の空想科学小説に犯罪小説或は探偵小説を結びつけたとも見るべき多くの作を發表している点で、唯一の異色ある作家であつて、その主要作品としては「振動魔」「俘囚」「キド効果」「赤外線男」などを挙げる事が出来る。外に「柿色の紙風船」の如きユーモアとペーソスの作品があり、又「三人の双生児」の如き大胆奔放の怪奇小説がある。この作家は本名によつて多くの科学的説物を發表しているが、一方では又軍事科学小説の作も少くはない。その多方面であること他に類例がないと思ふ。

初出…日本探偵小説傑作集 昭和10年9月
底本…江戸川乱歩全集第25巻 平成17年

* 日本探偵小説の多様性について [＊7]

江戸川乱歩

日本の探偵小説の過半数は本当の探偵小説でないといふことが云われている。私自身もこの説には同意をexpressするもので、探偵小説であるからには、探偵的な興味、つまりある難解な秘密を、なるべくは論理的に、徐々に探り出して行く経路の面白さというものが主眼になつていなければならぬ。その外の所謂探偵小説、例えば異常な犯罪の経路を描いたもの、犯罪その他異常な事件の恐怖を主眼とするもの、怪奇なる人生の一面断面を描いたもの、精神病者又は変質者の生活を描いたもの、

もの、ピーストン風の「意外」の快感に重点を置くものなどは、犯罪小説、怪奇小説、恐怖小説などに属するものであつて、探偵小説とは云えない。

これは分りきつた事のように、実は何となくハッキリしてないのであるが、その原因は世のジャーナリスト達が、探偵作家の書くものは、犯罪小説であるが怪奇小説であるが、凡て探偵小説という一色の名で呼び慣わした事、探偵雑誌「新青年」出身の作家は悉く探偵小説家であり、そこに掲載される犯罪、怪奇、幻想の作品は皆探偵小説であるかの如き誤つた考え方が一般に行われて来たことなどにあるのだと思ふ。

併し、それはそれとして、探偵作家がその興味の赴くままに犯罪文学に筆を染めようと、怪奇、幻想の物語を書こうと、少しも差支ないことも亦分りきつた話である。イヤそればかりか、犯罪小説家、怪奇小説家というものがハッキリ分立していかない日本の小説界では、探偵小説出身の作家達が、謂わばその親類筋であるそれらの方面へ思うまま手を拡げて行くことこそ望ましいのであつて、そこに本来の探偵小説そのものの成長、拡充もあり、日本探偵小説壇の好もき多様性が見られるのだと思ふ。

日本探偵小説の多様性は、必ずしもそれに犯罪、怪奇の文学が混つてゐるからばかりではない。探偵小説そのものも、作家の色分けの多様性に於て、出發以來僅々十年余りにしかならない我々の探偵小説界は、何十年の歴史を持つた英米のそれに比べても決して遜色がないと云つていい。

探偵小説のトリックには、外国でも日本でも、物理化学に関するものが大多数を占めてゐるのだが、その方面の専門家には、応用化学専攻の甲賀三郎、大下宇陀児があり、電気学専攻の海野十三、延原謙があり、小栗虫太郎は心理的トリックと共に物理、化学のトリックにも優れてゐるし、大阪圭吉は機械的トリックの

名手である。又心理的探偵小説の方面では、木々高太郎の精神分析的探偵小説は英米の本場にも比類のない程のものであるし、水上呂理も精神分析作家であるし、又心理学上の題目（心理試験、錯覚、色盲等々）をトリックとして用いた探偵小説は、多くの作家によつて書かれてゐる。

〔略〕

論理探偵小説はあくまで論理に進むのがよい。犯罪、怪奇、幻想の文学は、作者の個性の赴くがままに、いくら探偵小説を離れても差支はない。そこに英米とは違つた日本探偵小説界の、寧ろ誇るべき多様性があるのではないか。

初出…改造 昭和10年10月号

底本…江戸川乱歩全集第25巻 平成17年

* 深夜の東京散歩 [＊8]

海野十三

深夜の街には、深夜人種というのが確かに居る。彼等は何の職業を持つてゐるのかハッキリ分らないが、とにかく実に楽しい表情をしてゐる。そして非常に元氣に見える。といつて決して喧騒ではない。悟りきつた僧侶のように物静かだ。彼等は、誰も彼もが殆んど同一の特異な人間型を持つてゐる。そこに深夜の神秘から共通な信仰を得てゐるように思ふ。そういう意味に於て、深夜人種は立派な或る力によつて、統制されてゐるように思ふ。僕の書いた小説では、これが髭武者のルンペン老人として描かれてゐるが、実は特殊な人間があるのに非ずして、それは無形の力、深夜の神秘性に外ならない。

深夜は、何処を歩いてみても、楽しいものであるが、殊に僕が最も好きなのは、深川の浅野セメント工場を中心とする一角である。そこがどんなに素晴らしいかということについては、僕は寧ろ筆にすることを避け

たい。只その一角を深夜に歩いてごらんさいとお薦めするだけである。道筋だけを申して置くが、永代橋を深川の方へ渡るのである。すると橋の左の袂に交番があるが、それに添って左折する。それから一つの橋を渡るが、その次にもう一つの橋がある。この辺から静かに歩いたり、立ち止ったりして、浅野セメントの工場を右に仰いでアスファルトの道を清洲橋の畔まで歩くのである。きつと、諸君は自分が日本に在ることを暫くは忘れられるであろう。

〔略〕

僕にとつて非常に嬉しいことは、江戸川乱歩氏が、この風景を大いに認めて下さったことで先日出版記念会の席上でも、それを云つて下さった。乱歩氏こそは、実は僕より何倍かの深夜の散歩愛好家である。僕は昔、乱歩氏が、浅草公園の口ハ台に夜明かしをされた話を聞いたことがあつたが、深い感激を覚えた。実は先夜、乱歩氏と共に、例の浅野セメント地方を巡遊し、それからこの浅草公園に連れて来て頂いたのであるが、当今は公園内の浄化が徹底的に行われていて、昔そこに見られたような特異な風景は、最早どこにも落ちていなくなつた。只僅かに、近所の夜明かし飲食店の情景が、なんとなく古めかしい懐かしい匂いを僕たちに贈つてくれたばかりであつた。

初出…探偵春秋 昭和11年10月号

底本…海野十三全集別巻1 平成3年

グルーサムとセンジュアリティ〔*9〕

江戸川乱歩

戦争前「エロ・グロ」という言葉が流行し、私の探偵小説もその代表的なるもの一つとして、心ある向きより非難攻撃をあげられていた。私は必ずしも態と時流に迎合したわけではないが、少くとも、子供なども読む程度の低い大衆娯楽雑誌にセンジュアル且つグルーサムな探偵小説を書いたことは非常にいけな

つたと悔んでいる。今後はそういうあやまちを再び繰返さないつもりである。

初出…赤と黒1号 昭和21年9月

底本…江戸川乱歩全集第25巻 平成17年

〔*〕

〔*〕

探偵小説の方向〔*10〕

江戸川乱歩

戦争中人々は西洋の没落を説き、合理主義を蔑視し、東洋の直観主義を謳歌した。しかし、このことあげせざる直観主義は西洋の合理主義、科学主義の前に敗れ去つたのである。われわれは今深い反省途上にある。この反省より生れ来たるものが非合理の方向にある筈はない。私は俳諧、茶の湯、墨絵の直観主義を決しておろそかに思うものではない。しかし小説は俳文や日記ではないのであるから西洋流に構成のある文学がもつと目ざされなくてはならない。大工の勘によつて建てられる自然木の家屋ではなくて、精密な設計製図に基づいて建てられる鉄筋コンクリートの建築、そういう作品が企図されなくてはならない。探偵小説についても同様である。いや探偵小説こそ、その構造性と論理性を不可欠の条件とするものである。しかも従来の日本探偵小説には、それらのものが甚だ稀薄であつた。むしろ論理性を軽蔑するが如き傾向すらあつた。

しかし敗戦一年、反省途上にある日本人の嗜好は少しずつ変化して来たかを感じられる。戦前には見られなかつたほどの勢で探偵小説が要望されている。しかも所謂変格ものではなくて純推理小説への要望である。この嗜好の変化と探偵雑誌の非常な売行きは、論理小説の前途に大きな希望を抱かせるものである。

私はこのごろ無名新人の原稿を見る機会が多いのであるが、そういう作品の大多数が純推理小説を旨としている。その中には従来見られなかつたような優れた作も散見し、近い将来には少なからぬ新人が世に出るのではないかと期待される。旧人の努力も無論望まし

いのであるが、一層期待されるのは有力な新人の出現である。日本探偵小説を革命するが如き新人の擡頭である。私は今論理探偵小説の黎明を感じている。そういう機運が澎湃として動きつつあることを、身辺のあらゆる事象の裏に感じている。

初出…新大阪 昭和21年9月

底本…江戸川乱歩全集第25巻 平成17年

〔*〕

〔*〕

探偵小説雑感〔*11〕

海野十三

探偵小説論に、各人各説あるは結構だ。探偵小説論は、ちゃんと答が割切れて出るものではない。一つの論にたて籠つて、他の論を全然認めないというような風潮が、若い人の間にある。熱情のあるのは結構だが、視野の狭いのは困る。

探偵小説は、やはり小説だから、まづもつて小説として立派なものでなくてはならぬ。探偵小説は大衆文学の一つだと思ふが故に、それは第一条件として面白くなくてはならない。面白くない探偵小説なんて、意味がない。

本格探偵小説を尊敬するのは結構だが、面白くない本格探偵小説は一向結構でない。そのやうな作品ばかり読まされては、たまつたものじゃない。そういう風潮を本気で薦めている者があるとしたら、それは探偵小説というものを見誤っている者だらう。

立派な本格探偵小説なんて、探偵作家と名乗る者の何パーセントが書き得るやら、とにかく稀である。またそれを書き得る作家にしても、立派なる本格ものは、一生を通じて一作あるかなしかである。

そういうことが分つていながら、若い作家たちを、そういう方向へ追ひたてるやうな者があつたら、その人は変態男であるといわれても仕方があるまい。探偵小説らしい探偵小説を書くべきであると思ふ。シャーロック・ホームズ探偵だとか怪盗ルパンへ復

帰すべきである。

あゝ、という探偵小説こそ、真に大衆に愛好されるいゝ探偵小説なのだ。

あの程度の、謎、推理、スリル、サスペンス、テンポ、情熱、正義感、新鮮味、そして面白さ、まことに大衆的ではないか。

探偵小説は、あのやうに面白く読ませて、慰めとなり、一つの軽妙な気分転換の資となれば、それで役割は十分に果たしたことになるのだ。作家たるもの、その他のことを狙うには及ばないと極言してもいゝと、私は思っている。

クエーンの『ローマン・ハット・ミステリー』は面白い方だが、『ハーフウェイ・ハウス』に至つてはその反対のものだ、

クロフツの『樽』みたいな退屈な面白くないものを、探偵小説の十大傑作の一つなどと褒めるのは愚の骨頂だと思ふ。

ヒルボツツ『レッド・メイン』なんか、はじめをすこし読んだだけで作者の魂胆は早くも分り、あとは退屈そのものだ。傑作探偵小説だなんて、とんでもない。乱歩氏は『石榴』を自分の名作として居るが、乱歩氏の作品を年代順に読んで来て、あれにぶつかる、と、小手先の器用さは気がつくが、およそ総ざらえ的な陳腐なもので、乱歩独特の高い香などすこしも感ぜられない。だから私は、あの作は駄作だと思つている。

坂口安吾氏その他が探偵小説を書くのは結構だが、どうせろくなものは出来ないだらう。十年間この道を勉強したと聞いた上でないと、私は本気になつてそれらを読むつもりはない。

初出・底本…探偵作家クラブ会報 昭和22年11月

* * *

弔辞〔*12〕

江戸川乱歩

海野君、君が僕ら探偵作家の仲間に加つたのは昭

和三年のことだった。思えば二十余年の昔だ。君は

H・G・ウェルズとコナン・ドイルとモーリス・ルブランが好きだと云つていた。そして探偵小説に君の専門である科学手法と、君が生来持つていた企まざるユームアの新風を齎らしてくれた。私は大正末期、所謂探偵小説が起つてから今日までに三つの隆盛期があつたと考へているが、君は第一の隆盛期の半ばから我々に加わり澁刺たる新風を吹きこんでくれた。そして昭和八、九年に始まる第二の隆盛期には小栗虫太郎、木々高太郎両君と共にこの時期の先頭を切るトリオを為し三人で編輯する雑誌「シュピオ」を起し探偵小説革新のために大いに活動してくれた。

戦後の今日第三の隆盛期にさしかかつた処であるが、君は新人が現われる都度これを心から喜んでくれた。若し君が健康だつたらこの第三の隆盛期にもまた先頭に立つて指導の衝に當つてくれたことと思うが、多く病床にあつた為に療養し乍ら思うに任せなかつた。しかし新人が君をお訪ねすれば大いにこれを激励し指導してしてくれた。それだけでも非常に頼もしい力であつた。その君が今急逝された事は探偵小説界にとつてこの上ない不幸である。実に残念だと思ふ。

底本…海野十三メモリアル・ブック 平成12年

* * *

海野君のこと〔*13〕

江戸川乱歩

海野君の作家としての資質には純探偵小説的なものよりも科学小説的なものの方が多かつたやうに思はれる。同君が「新青年」に最初の連続短篇（これは皆探偵小説であつた）を書いてゐる頃だつたと思ふ。よく私の家を訪ねてくれたし、私も同君の勤先の電気試験所を訪問して、試作中のテレビジョンを見せてもらつたりしたものだが、海野君はその頃まだ科学小説は殆んど書いていなかつたので、実は探偵小説よりもウェルズ風の科学小説が書きたいのだといふ心境をもらし

てゐた。そして、それは後に実現されたのである。

海野君は探偵小説ではルブランが好きであつた。コチコチの論理ものよりはルブランのやうな面白いものをといふのが彼の主張で、甲賀木々両君の論争が盛んであつた昭和十年前後、海野君は探偵小説通俗論では甲賀君と意見を同じくしたが、本格論には反対で、出来るだけ探偵小説の範囲を広く考へやうとした。それはよいのだが、勢ひ余つて「新青年」出身作家の書くものは悉く探偵小説なりといふやうな口吻をもち、こともあり、その点には私には同感出来なかつたので、「鬼の言葉」でもそれに触れ、会合の席などでも海野君と議論したことがある。

戦争中探偵小説が圧迫された頃、海野君は我々の先頭に立つて情報局との連絡をとつてくれ、情報局検閲官と我々との対談会の席では、海野君が最も雄弁な論陣を布いたものであつた。忘れ難い思出の一つ。

戦争中から逝去までの数年間、海野君は少年小説界の巨人であつたが、この方面ではもつと科学性のある押川春浪を目ざしていた。（私は同君の口からさういふ意味の言葉を聞いたこともある。）そして、それは見事に成功し、全国数百万の少年を湧き立たせたのである。

海野君についてはもつとくだけた思出話がたくさんあるが、こゝには堅いことだけを書いた。〔全文〕

初出・底本…探偵作家クラブ会報 昭和24年6月

* * *

深夜の海野十三〔*14〕

江戸川乱歩

今から二十年近くも前の話、海野君が「新青年」にはじめて連続短篇を書いた頃、早稲田裏の戸塚の私の家へよく遊びに来てくれたものであるが、私はその頃深夜の浅草公園をうろつき廻る病癖を持つていて（随筆「浅草趣味」）海野君にこれを話すと、同君も広野の如き深夜の都会を歩くのが好物の由で、是非一度

一緒に散歩しましょうということになり、ある春の夜、深夜の銀座からはじめて（当時はタクシーが非常になかった）浅草の闇をそこはかとなくさまよい、遂には兩人とも殆んど馴染のなかった吉原へ車を飛ばし、登楼する気はないので、郭内の町々をめぐり歩き、吉原土手を徘徊して、名物の徹夜の馬肉屋へも入る気はなく、何とはなしに夜明け近くまで深夜の東京を満喫したことであった。その夜であったか、別の時であったか、二人だけで向島の何とかいう宿屋に泊り、一緒に風呂に入り、寝そべって身の上話を語り合ったりした。海野君について最も印象深い思出である。その頃の同君は意気なハンチングをあみだに被り、颯爽たる美青年であった。彼の名作「深夜の市長」が出たのはそれから間もなくであったと思う。

〔全文〕

初出：宝石 昭和24年8月号

底本：江戸川乱歩推理文庫60 昭和62年

探偵小説あれこれ〔*15〕

江戸川乱歩、朝山蜻一、大河内常平

朝山 戦後二三年に高木彬光氏が本格ものを書いています、あれはどうですか。

江戸川 戦時中たまっていたものが出て本格ものになったんでそう長くは続かない。読者もあきてくるからね。

大河内 先生は本格ものじゃないものを、その後ずつと書いていますね。それでまたうけていますが…。

江戸川 それはうけないよりうけた方がいいからな。大体日本人は本格ものは好きじゃないよ。アメリカ人は本格もの好みだけれど日本人はフランスのジュールジュ・シムソンの愛読者が多いね。黒岩涙香はサスペンスやスリルで読ませたんだ。理屈や筋で読むのが日本では少いのだ。本格ものは発展しないよ。

初出：底本：報知新聞 昭和28年2月、3月

* 初出：底本：報知新聞 昭和28年2月、3月

ペン皿とテレヴィ〔*16〕

江戸川乱歩

海野君の思出はいろいろある。二人で深夜の東京をさまよったこと、戦争中の彼の颯爽たる風姿など、まだ目にあざやかだが、ここにはペン皿とテレヴィのことを書く。

海野君が新青年に最初の連続短篇を書いていたころ（昭和六年か）よく私の高田馬場の下宿時代のうちへ、遊びに来てくれた。まだ同君の出発期であった。その初対面のとき漆器のペン皿を持つて来てくれたのが、今でも残っている。当時の海野君は、可愛らしい美青年で、意気なハンチングを冠つた写真を貰つたのが、アルバムにあるが、これを見ると思慕の情、禁じがたきものがある。

あれはいつごろのことであつたか、日支事変には入つていたと思うが、太平洋戦争は未だであつたかも知れない。海野君の勤め先の電気試験所で、テレヴィの試作をやつていて、同所へ行けば映像が見られるというので、誘われて海野君の部屋を訪ねたことがある。そして所内の別室の像を映すのを見たのだが、何が映つたのか、どの程度明瞭であつたか、いま記憶がない。あれがテレヴィというものの見はじめであつた。

その時海野君は押川春浪の名を口にした。「僕は探偵小説よりも、実は押川春浪風の科学と冒険の物語を書きたいのですよ」と告白した。海野君は大衆に広く読まれるものを書きたいという性格で、第二の押川春浪を、或は一步前進した新らしき押川春浪を目ざしているかに感じとれた。

そして彼は、そのときの抱負を実現した。科学と冒険の作品が夥しく発表せられ、ことに少年もののそれは、当時の如何なる少年読物も及ばない大読者を獲得した。戦争中など彼の作は常に少年もののベストセラ―であった。歿後七年の現在でも盛んに版を重ねている。彼がやや気恥しげに、押川春浪の名を口にしたと

きの像が思いつくのである。

初出：底本：日本探偵作家クラブ会報 昭和30年5月

* 趣意書に添えて〔*17〕

江戸川乱歩

阿波掃苔会と四国文学会の御協力で、海野十三君の文学碑を同君の生誕地にお建てくださるといふ御計画を聞き感謝にたえません。

海野君は推理小説作家として著名であつたばかりでなく、日本でも最近漸く流行の兆を見せはじめた科学小説に、二十数年前先鞭をつけていたことは銘記すべきであります。その海野君が、まだこれからというときに、戦争中従軍の疲労から、若くして病逝されたことは、思い出すたびに哀惜の情を禁じえないのであります。

今度の御企画で、同君の記念の碑が故郷に残ることになり、われわれも甚だ心強く、双手をあげて御計画に賛意を表します。東京の故人の旧友たちと計り、われわれも応分の寄附をしたいと考えております。

昭和三十七年三月四日

〔全文〕

初出：JU通信1号 昭和37年3月

底本：JU通信復刻版 平成10年

祝辞〔*18〕

江戸川乱歩

海野十三君の文学碑が同君出生の地に建てられ今日、建碑式が挙行されますに当り、心よりお祝い申しあげます。これひとえに徳島市、阿波掃苔会、四国文学会の皆様の御尽力によるものと深く感謝しております。私も建碑式に参列してお喜びを申しのべたいのですが、病気のため思うにまかせません。はるかにお祝いのことばをお送りする次第であります。

初出：JU通信7号 昭和37年7月

底本：JU通信復刻版 平成10年